

天気輪の柱

岩手県の風土を背景としたイーハトーブとつなげた理想郷の空に乳白色の天の川が天空を彩り流れていた。その天空へ銀河軽便鉄道の列車を走らせ、心象という世界で想像した異空間を主人公ジョバンニ少年に幻想の旅をさせるという宮澤賢治の童話「銀河鉄道の夜」を夏の夜の夢物語として楽しく読んだ思いがある。ガスコーブドリの伝記」や「水仙月の四月」など自然現象の描写が巧みに配置されている最も魅力的な作品の一つである。六十年以上前に書かれたと思えないほど斬新で知的想像力が随所に散りばめられ、いまの世においてもでも発想と展開で限りなく魅せられてしまう。

気がついてみると、さつきから、／ごとくとことこと／ジョバンニの乗つてゐる小さな列車が／走りつづけてゐたのでした。／ほんたうにジョバンニは夜の軽便鉄道の、／小さな黄色の伝統の並んだ車室に、／窓から外を見ながら座つてゐたのです（宮澤賢治全集）ちくま文庫」という銀河ステーションからの旅の始まりは北の十字（白鳥座）から南十字星（サウザンクロス）まで天の川の河原をいに旅して再び戻るという、作者のいう幻想四次元空を舞台とするこの物語である。

童話と言ふ形態となつてはいるが、漆黒の宇宙を舞台としての透明な暗さが底流に流れてい

る。不思議な川、水のない空、見えない天の川の水、透きとおつた銀河の済、そしてタイタニック号で遭難した姉妹やケンタウルスの祭で水死した親友カムバネルラを夜汽車の軽便鉄道に乗せて、天の川の向こうに消えさせる。死の透明なイメージが流れ、ジョバンニを除いて登場人物すべて天の川の彼方に消えてしまう。現世の「生の空間」から幻想四次元空間という死の空間へ、そして再び生の空間へも戻つて来る物語である。その旅立ちと生還の舞台が「天気輪の柱」のたつ街外れの丘である。

その真っ黒な、松や楓の林を越えると、俄かに、がらんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘つてゐるのが見え、また頂の天気輪の柱も見わけられたのでした。ジョバンニはツリガネソウやノギクがいちめんに咲く丘の天気輪の柱の下から、いつしか天空の旅に出てしまう。現世から幻想の異空間へ主人公が跳躍する最も重要な境界に新しい「天気輪の柱」という言葉をあてた。

北の十字から南十字への十字架の旅、幻想列車の走る天上と地上との接点にたつこの柱は、天空の夜空の闇の中に白くまぶしく浮かび上がつた十字架のイメージとされてきた。作家であり宮澤賢治の研究家でもある別役美氏は、十字架のたつ死の丘、町はずれの辺境を望む丘をイメージに重ねあわせで、天の気配を読み取る柱「人間の運命を左右する天の意志のよくなき世界への巡礼」という本が存在している。主人公クリスチャーチが「落胆の沼」や「虚榮の市」ほんとうの道」をとおり最後に「暗黒の川」を渡

が深く思索していた法華経のなかの「仏の前に輝くばかりの七宝の塔が立ち…」という輪廻塔という解釈も根強い。

まったく別の見方として大気光学の現象としての太陽の量を重ねた「太陽柱」説を根本順吉氏が唱えている。太陽柱というのは、低温で空気中にきわめて小さな平板の水晶が無数に浮かんでいる時に起る光柱である。「…うしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形となつて、しばらくは螢のように、べかべか消えたりともつたりしてゐるのを見ました。それはだんだんはっきりして、たうたうりんとうごかないよやうになり、濃い鋼青の空にたちました。いま新しく灼いたばかりの青い鋼のような、そらの野原にまつすぐすきつと立つたのです。」ケッチ図のはいったエクスナ著の「気象光学」どう本が所蔵されていた。気象への関心も深い賢治の時代、近くの盛岡測候所には太陽柱のスケッチ図のはいったエクスナ著の「気象光学」測候所」という話や長期予報を出したりしていることを考えると、訪れてその本を見た可能性は十分にある。銀河系のまつただ中へ汽車を走らせ、異空間への跳躍に丘の向こうに立つ、太陽の光柱と量を重ねた着想も大いに興味をそそられる。

「銀河鉄道の夜」の書かれた時代以前に、この作品とあら筋よくにたジョンバーナンの「天路历程」というサブタイトル「この世からあの世への巡礼」という本が存在している。主人公クリスチャーチが「落胆の沼」や「虚榮の市」ほんとうの道」をとおり最後に「暗黒の川」を渡

り濡れたこの世の衣」を脱ぎ捨て、大気の層を上って「大きな丘」の上の都にたどりつき巡礼の門にはいる。時空間の遍歴の筋道と演出がきわめてよく似ており、眠りに入るところから

夢から目覚めるところで終わるところまで類似性をみせていく。演劇家の内田朝雄氏の『稲と宮澤賢治 農村漁村文化協会』の中に述べられている。紹介されている。天氣輪の柱も賢治

が太陽の光柱と暈というイメージを重ねていた